

# 101歳反骨のジャーナリスト

近年は安全保障関連法や特定秘密保護法の廃止を訴えている。

四八年二月、故郷でタブロイド判二坪の週刊紙「たいまつ新聞」を創刊。同紙は米国占領下の検閲に屈せず、教育や農業問題を中心に社会の矛盾を掘り下げた。七八年二月の七百八十号で休刊した。

一三三年に東京外国語学校(現・東京外大)卒業後、報知新聞、朝日新聞の社会部記者として活躍。四二年にインドネシア上陸作戦に従軍。終戦日の四五年八月十五日に退社した。

「病床で日本を案じ」面  
一九三六年に東京外国語学校(現・東京外大)卒業後、報知新聞、朝日新聞の社会部記者として活躍。四二年にインドネシア上陸作戦に従軍。終戦日の四五年八月十五日に退社した。

アシア・太平洋戦争で大本營発表をそのまま報道した責任に向き合つて敗戦を機に朝日新聞社を辞め、戦後は反戦・平和を訴え続けた反骨のジャーナリストむのだけじ(本名武野武治)さんが二十一日午前零時二十分、老衰のため死去した。百二歳。秋田県出身。葬儀・告別式は近親者のみで営む予定。しのぶ会の開催が検討されている。

# むのだけじさん死去



今年5月3日の憲法記念日、東京都江東区で開かれた集会での演説が、公の場での最後の姿だったむのだけじさん

「今が人生のつべん」。戦後還暦を迎えた二〇〇五年、社会部の企画取材のために秋田県横手市のご自宅を訪ねた時、むのさんは九十歳を超えて講演に執筆に多忙だった。  
米国が始めたイラク戦争に日本が自衛隊を派遣し、改憲の動きも活発になっていた。一九四五の敗戦の日、「戦争の本当の姿を伝えられなかった新聞人としての戦争責任を取る」と、朝日新聞を退社したむのさんは「再び戦争に向かおうとしている」ことに黙つていられたのだ。  
そんなむのさんを戦争体験の語

り手として二〇〇六年夏、企画の一環としての対談が実現した。お相手は、むのさんには孫世代に当たる作家雨宮処凛(かりん)さん。屋敷を挟んで六時間以上延々と語りあった。むのさんは人々が犠牲に流されて体制に従い、戦争に巻き込まれていった怖さを語った。  
「戦争を始めたのは陸軍でも、それを止められなかった。許した国民にも責任はある」と。社会の公器である新聞は統制対象になり自由な言論が許されなくなっていくが、「統制よりも怖いのは自主規制。家族や周りが怖い」と強調

## 評伝

反戦平和を願つジャーナリストは百年の生涯を駆け抜けた。

# 戦時報道省み 反戦平和訴え

「風化していく戦争体験をどうしたら受け継ぐのか」という問いには「戦争は経験したから分かるというのではない。戦争が人類にとって重大な問題だと思つたら若い人は自分で勉強して」と励ました。  
一九四八年に郷里で「たいまつ」を創刊。一度は捨てたペンを再び握らせた原動力は、その前年の連合軍総司令部(GHQ)が出した2・17セネストの中止命令への怒りだ。「民主主義を掲げた米国の占領政策はこそ」と、創刊号に書き付けたのは中国の作家魯迅の言葉。「沈黙よ！ 沈黙よ！ 沈黙の中に爆発しなければ、沈黙の中に滅亡するだけである」。憲法の本質が崩されようとしている今、死ぬまで敬愛する文字者の言葉を叫んでいたのではないか。  
「どんな悪い平和でもいい戦争に勝る。平和は意識的な戦いの中でしかつかめない」と説いたむのさん。原点は、戦争中に三歳のまな娘をチフスで亡くした経験にある。一度と子どもが犠牲になる世の中にしない。一人一人が変われば大きな力になる。  
数々の名言を残したむのさんが語った言葉がある。平和を願つたら、そのための記事を毎日書き続けること。願ひは「正義(イスマ)」となり、「ジャーナル(日記)」は「ジャーナリズムになる」。書き続けなくてはならない。私たちはむのさんの思いを引き継ぐ。(佐藤直子)

# 東京新聞

〒100-8505 東京都千代田区外神田二丁目1番4号  
電話 03(6910)2211

読者とともに  
紙面へのご意見  
お問い合わせは

●電話 03-6910-2201  
土日祝日除く9:30~17:30  
●FAX 03-3595-6935  
東京新聞ホームページ  
TOKYO Web  
www.tokyo-np.co.jp  
政治部など  
本紙記者が  
ツイッパで  
つぶやいています  
(一欄は5面に)

ご購読お申し込み  
0120-026-999